様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：４２２０５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ２２２３２

研究課題名（和文）美術教育における性的マイノリティ当事者との協働によるプロジェクト型題材の開発

研究課題名（英文）Development of Project-Based Subject Matter in Collaboration with Sexual Minorities in Art Education

研究代表者
茂木　克浩（Mogi, Katsuhiro）

足利短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：１０８８５２４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、美術の授業を通してアートの手法を学校教育に取り入れた。本研究におけるアートの手法とは、多様性を生かした協働的な課題解決の手法であり、それ用いて子どもたちが多様な性のあり方と向き合うことのできる題材の開発を目指した。
結果としてセクシュアル・マイノリティ当事者と協働で３つの題材を開発し実践した。その結果、美術の授業で行った表現と鑑賞の活動が、多様な性のあり方を含む自他の多様性を理解するのに有効であるという結果を得た。本研究の成果は報告書としてまとめ、そこに開発した題材の流れ等も掲載することで学校現場での広く活用できるようにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
性の多様性について理解を促進するために、学校教育全体を通して性の多様性を扱った実践がで求められている。しかしこれまでに美術科・図画工作科においては実践が行われてこなかった。本研究においてセクシュアル・マイノリティ当事者と３つの題材を開発したことは、美術科・図画工作科における今後の実践の広がりに向けた第一歩を示したといえる。また開発した題材を広く公開し学校現場において活用できるようにすることで、子どもたちの性の多様性への理解促進に貢献することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we incorporated art methods into school education in art classes. The art method in this study is a collaborative problem-solving method that uses diversity, and we aimed to develop subjects that would enable children to confront the diversity of sexuality. As a result, we developed and tested three subjects in collaboration with a sexual minority. The results showed that the activities of expression and appreciation conducted in art classes were effective in helping children understand the diversity of themselves and others, including sexuality. The results of this study are summarized in a report that includes the flow of developed materials so that they can be widely used in schools.

研究分野：美術教育

キーワード：美術教育　セクシュアル・マイノリティ　多様性　図画工作　外部人材活用　課題解決型学習　アート

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1. 研究開始当初の背景

2015 年文部科学省は「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を発表し翌年には教職員向けの手引書を発行した。2017 年には「いじめの防止等における基本的な方針」が改訂され、セクシュアルマイノリティに対するいじめの防止について言及された。これを受け、当事者生徒への支援と共に学校現場における教育実践の必要性も高まってきていた。研究開始段階では、性の多様性について扱った授業実践については一部の教科で多数報告されていたが、美術科(図画工作科を含む)の授業で扱ったという報告を目にすることはなかった。性の多様性については学校教育全体を通して継続的に行うことが求められる中、美術科での題材開発と実践の蓄積が急務だと考えた。そこで、セクシュアル・マイノリティ当事者と協働で多様な性のあり方について考えることのできる美術科の題材開発を行うこととした。

アート(美術)は、これまで顕在化しなかった社会の課題を明らかにし解決に導くと共に、そのプロセスにおいて多様な価値観を受け入れ、多くの視点を提供し、それらを生かし合う機能をもつ。つまりアートとは、多様性をいかした協働的な課題解決の手法ともいえる。美術の授業を通して、このようなアートの手法を学校教育に取り入れることで、子どもたちが多様な性のあり方を向き合うことのできる題材の開発が可能だと考えた。

2. 研究の目的

本研究では以下の２つの目標を設定した。

(１)セクシュアル・マイノリティ当事者と協働で、多様な性のあり方と当事者たちを取り巻く様々な課題と向き合い考えるための美術科のプロジェクト型題材を開発する。

(２)開発した題材が子どもたちにどのような学びを生んだのかを明らかにすることで、その有効性を示す。

本研究を通して開発した題材は、web ページや研究報告書の配布等を通して公開することで、最終的には広く学校現場で活用できるようにしていくことを目指す。

3. 研究の方法

本研究は以下に示す３つの方法で進めた。

(１)学校教育の中で性の多様性に関する内容を扱うことについて現場の教師がどのような意識をもっているのかを質問紙を用いて調査する。

(２)美術科・図画工作科で性の多様性について扱った先行研究や実践について、論文や専門雑誌の記事を中心に調査を行う。

(３) 生徒が制作した作品やワークシート等を分析することで、開発した題材が多様な性のあり方への理解を生んだのかを明らかにする。

4. 研究成果

(１)性の多様性に関する内容がどの程度学校現場で扱われているのか、それらを授業内で取り扱うことについて教師がどのように捉えているのかを把握するために、実践協力校のある群馬県内の小・中・高等学校 13 校に勤務する教師を対象に質問紙による調査を行った。その結果から、調査に参加した多くの教師が、学校の教育活動の中で、性の多様性について取り扱うべきだと考えている一方で、実際に授業で扱った事例が少ないことが明らかになった。また性の多様性について取り扱うのに適した教科として、学活や道徳、総合、保健体育をあげる教師が多く、その他の教科で取り扱うというイメージをもっていないこともわかった。その原因として、教師自身が性の多様性に関する知識不足を自覚しており、それによって生徒へ指導することに自信がもてないでいることも明らかになった。このことから、当事者や専門家と協働で各教科にあった授業モデルを開発し、それを公開することで学校での取り組みが広がる可能性を見出すと共に、その必要性を再確認するに至った。

(２)性の多様性について取り扱った図画工作科・美術科の授業実践に関する先行実践/研究の調査を、論文及び専門雑誌の記事を中心に行った。その結果、学術論文として公刊されたものは少なく、記述があったものについても教育効果の測定対象からは外されており詳細を知ることは叶わなかった。そこでセクシュアル・マイノリティ当事者の外部講師と協働で図画工作科の実践を行っている小学校教諭へ協力を依頼し、氏がこれまでに実践した３つの授業について、どのような変化が子どもたちにおこったのかを分析した。その結果、表現活動を通して性の多様性について考えることは、知識の獲得だけでなく当事者の置かれた状況に気づき、彼らの気持ちに感覚的に近づく(寄り添う)ことにつながる可能性があるという示唆を得た。その一方、今回対象とした実践ではセクシュアル・マイノリティに関する基本的な知識を教えるという面が強くなり、子ども自身が考えるという側面が弱かったという課題も明らかになった。

(３)題材開発にむけてセクシュアル・マイノリティ支援団体の交流会に参加した。そこで参加者から学校教育や日常生活に関する疑問や不満、意見を聞く機会を得た。プロジェクト型の授業実

践では「真なる課題」を扱うことが重要とされる。そこで当事者の生の声をきくことで、題材で扱うべきテーマを検討した。検討した内容も踏まえながら、セクシュアル・マイノリティ当事者と各題材の実践を担う美術科の教師と協働で題材開発を行った。以下に開発した各題材について大まかな流れとそこから明らかになったことについて報告する。

まず中学校１年生を対象にした題材①を開発、実践した。この題材では性の構成要素である「性表現(Gender Expression)」に注目した。その中でも、モノを自らの身体に身につけることで表現する「ファッション」に注目した。題材は主に次の３つの活動で構成した。Ⅰ.アニメやゲームのキャラクターを鑑賞することで、服装や持ち物といった見た目から得られる情報と性格や性のあり方、能力と言ったその人物を構成する要素との関連について捉える。Ⅱ. 自分らしさをもとに「見られたい自分」を表現するためのアイデアを練る。考えたアイデアをもとに自らの写真に、様々な素材をコラージュし表現する(図１)。Ⅲ.制作した作品を相互鑑賞することで、見られたい自分と相手が受け取った自分との差について気づき、そこにズレが生じることやその原因、そのズレがもたらす結果について考える。この題材に取り組んだ生徒たちの感想等を分析した結果、自分らしさや、他者らしさについて考えること、人を見た目の情報だけで一方的に判断してはいけないということや、これまでに無意識に判断していたことへの反省も込められた気づきが生徒たちに生じていたことがわかった。一方で、「らしさ」について考えたことのない生徒や、考えるのが難しいと感じている生徒が一定数いることもわかった。

(図 1)コラージュで自分らしさを表現する様子[題材①]

題材②と題材③は中学校美術部の活動の一環として行った。題材①で課題としてあがった「自分らしさ」について考えることをテーマに題材を開発した。この題材では多様な性のあり方を象徴する６色のレインボーカラーに注目して「色」で自分らしさを表現する活動を行った。題材は主に次の３つの活動で構成した。Ⅰ.外部講師の生い立ちや活動、レインボーカラーに込められた意味についての説明を聞く。Ⅱ.ポスターカラーを混色して、自分を表現する６色作り出すと共に、それぞれの色に込めた思いを記述する。Ⅲ.作り出した色をインクで再現しオリジナルのカラーペンを制作する(図２)。そのペンを用いて自由に絵を描く。この実践から、生徒たちにとって自分らしさを構成する一つの要素として、好きな物やキャラクターのテーマカラー等、自分が好意を抱くものがあることがわかった。その一方で性格や理想のイメージといった、形として表すことの難しい本人の内面も要素としてあることもわかった。これらの要素については、どちらか一方から色を考えている生徒もいれば、両方から考えている生徒もいた。以上のことから生徒は様々な要素を組み合わせることで、自分らしさに迫ろうとしていることがわかった。

(図 2)自分らしい色を再現したインクをペンの芯に吸わせている様子[題材②]

題材③は題材②を行った数日後に同じ生徒を対象に実践した。この題材も題材②と同様に多様な性のあり方を象徴する６色のレインボーカラーに注目すると共に、その６色の実社会における役割に注目して題材開発し実践した。本題材では、６色をもちいて自らが持ち歩きたくなるバッグを作成した。題材は主に次の３つの活動で構成した。Ⅰ.レインボーグッズを身につけることやプライド月間の意味やねらいについての説明を聞く。Ⅱ.バッグのデザインを考える。Ⅲ.考えたデザインをトートバッグに描く(図３)。完成したバッグを持ってどこに行きたいのか発表する。こちらについても自分らしさを考えることにつながったという感想が多く見られた。題材②③全体を通して生徒が記述した感想には、個性の相互理解の大切さや、自分らしさについて隠す必要がないといった記述がみられ、ここから本実践が、性のあり方を含めたより多様な存在としての他者理解につながったと考えることができた。

(図 3)考えたアイデアをもとにトートバッグにデザインする様子[題材③]

最後に本研究全体の成果についてまとめる。まず本研究の一番の成果は、当初の目的であった多様な性のあり方について向き合うことのできる中学校美術科の題材開発と実践を行うことができたことにある。

題材開発に先立ち、小規模な調査ではあるが群馬県に勤務する教師が、多様な性のあり方について学校教育で扱うことについてどのような考えをもっているのかその意識を明らかにすることができた。開発/実践した３つの題材に取り組んだ生徒の感想等を分析した結果、表現と鑑賞の活動が多様な性のあり方を理解するのに有効であるという結果を得た。

なお本研究の成果についてはこれまでに、４回の学会発表、４本の論文執筆を通して発表した。

また開発した題材①②③については、美術教育をテーマにした展覧会においてパネル展示し、美術教育関係者を含む一般の来場者へ、実践の具体的な流れや成果を広く周知すると共に、会期中に題材③を来場者向けのワークショップとして実施した。

また学校現場に本研究の成果を還元することを目指し、研究全体の成果をまとめた報告用冊子を作成した。冊子に記載した QR コードを通して開発した３つの題材の指導案にアクセスできるようにすることで、学校現場で実践しやすいようにした。今後、本冊子を学校現場に広く配布することで、開発した題材を活用して成果を社会に還元していきたいと考えている。

本研究で得た結果を元に、既に新しい題材の開発と実践を行っている。今後も本研究の成果をもとに新しい題材の開発を行い教育現場に発信することで、多様な性のあり方について学校で学ぶ機会の充実に貢献していきたい。

〈参考文献〉

・文部科学省(2015)「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」
・文部科学省(2016)「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について（教師向け）」
・文部科学省(2017)「「いじめの防止等における基本的な方針(最終改定平成 29 年度 3 月 14 日)」
・渡辺大輔(2016)「『性の多様性を学ぶ』とはどういうことか」教育実務センター『高校生活指導』202 号
・渡辺大輔(2020)「『性の多様性』を前提に学校をともにつくり直す」日本教育評価研究会『指導と評価』No.787，日本図書文化協会
・日高康晴(2021)「教師 21,634 人の LGBTs 意識調査レポート」『子どもの“人生を変える”先生のことばがあります。 2021 』(https://www.health-issue.jp/teachers_survey_2019.pdf)(2023.06.01 アクセス)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 茂木克浩	４．巻 第56号
２．論文標題 性を構成する要素である性表現に注目した美術科の授業実践の成果と課題	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本美術教育研究論集	６．最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 茂木克浩、亀井章央、間々田久渚	４．巻 第43巻
２．論文標題 色を通して自他の「らしさ」について考える－性の多様性への理解に向けて－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 足利短期大学研究紀要	６．最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 茂木克浩	４．巻 第42巻
２．論文標題 性の多様性を学校教育の中で扱うことへの教師の意識 -群馬県の教員を対象にした質問紙調査の結果から-	５．発行年 2022年
３．雑誌名 足利短期大学研究紀要	６．最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大塚裕貴、茂木克浩	４．巻 第54号
２．論文標題 性的マイノリティについて知るための図画工作科の授業実践とその成果	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本美術教育研究論集	６．最初と最後の頁 125-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 茂木克浩
２．発表標題 性を構成する要素である性表現に注目した美術科の授業実践の成果と課題
３．学会等名 第56回日本美術教育研究発表会2022
４．発表年 2022年

１．発表者名 茂木克浩
２．発表標題 「自分らしさ」をテーマにした中学校美術科の題材開発
３．学会等名 第44回美術科教育学会東京大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 茂木克浩
２．発表標題 性の多様性について考える美術科の授業題材開発のための研究 －表現手段として「ファッション」を取り入れることの可能性－
３．学会等名 第55回日本美術教育研究発表会2021
４．発表年 2021年

１．発表者名 大塚裕貴、茂木克浩
２．発表標題 性的マイノリティについて知るための図画工作科の授業実践とその成果
３．学会等名 第54回日本美術教育研究発表会2020
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果をまとめた冊子である「性の多様性×美術教育 研究報告書」を作成した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関